

# 2023年3月3日 第3422回例会

於： 横須賀商工会議所



- <点鐘・開会> 12:30 前田 会長  
 <斉唱> 「君が代」「奉仕の理想」 ソングリーダー 佐久間博一 会員  
 <唱和> 「四つのテスト」  
 <ゲスト紹介> \*第4代よねやま親善大使 WATERS KAREN JULIA 様  
 <誕生日祝> \*岡田 英城 (S.36.3.9) \*五十嵐 俊男 (S.22.3.12)  
 \*勝見 慎一 (S.45.3.20) \*松本 好史 (S.29.3.20)  
 \*杉浦 浩子 (S.37.3.25) \*須藤 龍一 (S.42.3.27)  
 \*物井 宏介 (S.34.3.28) \*丸山 晁巨 (S.12.3.29)  
 \*立石 文彦 (S.44.3.30)

各会員

- <入会月祝> ・上林 茂・越川 昌光・谷 繁信  
 ・吉田 清・八巻 敏博

各会員

- <表彰> \*出席委員会へ感謝状授与

- <会長報告> \*ガバナー事務所より

- ・ロータリーレート変更のお知らせ 3月1日から 1ドル130円⇒136円
- ・トルコ・シリア大地震被災地へ寄付のご協力のお願いについて
- ・2023-2024年度地区委員会 副委員長ご就任委嘱の件について  
姉妹地区委員会 副委員長 北村 理和子 会員
- ・あいおぶらすチャリティーコンサート

ONE LOVE FUJISAWA～音楽を愛で繋ごう～について

3月30日(木) 会場:藤沢市市民会館ホール18:30開演(17:30 開場)

- <委員長報告> \*雑誌委員会 福西委員よりロータリーの友3月号

\*出席委員会 猿丸委員より2月分出席報告 2月平均出席率80.40%

	会員数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠席数	メークアップ数	出席率
2月 3日	114名	100名	73名(5名)	27名	6名	79.00%
10日	114名	106名	92名(14名)	14名	2名	88.68%
17日	114名	102名	72名(6名)	30名	7名	77.45%
24日	116名	101名	72名(5名)	29名	6名	76.47%

- <幹事報告> \*第3期分会費納入のお願いについて

- <出席報告> \*出席委員会 猿丸委員より3月3日の出席報告

会員数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠席数	メークアップ数	出席率
116名	103名	73名(6名)	30名	10名	79.81%

- <ニコニコ報告>

- ・三 役 第4代よねやま親善大使 WATERS KAREN JULIA さん、よくお出で下さいました。本日の卓話よろしくお願ひ申し上げます。
- ・八巻、大野、梁井、福西、長島、勝間、小山、新倉、鈴木、小沢、鈴木、小佐野、藤村、佐久間、猿丸、波島、徳永、齋藤、角井 各会員  
第4代よねやま親善大使 WATERS KAREN JULIA 様、本日は横須賀RCにお越しただきありがとうございます。卓話もどうぞ宜しくお願いします。
- ・五十嵐、勝見、杉浦、物井 各会員 誕生日祝いとして
- ・上林、越川、谷、八巻 各会員 入会月祝いとして
- ・1番テーブル野坂マスター、田村サブマスター 1番テーブルMTGにご参加いただいた皆様、ありがとうございました。長尾副会長、瀬戸幹事、角井副SAAありがとうございました。小沢会員、美味しい料理とお土産ありがとうございました。

- ・長尾、椿、小山(働)、渡邊、藤村、澤田、根岸、角井 各会員  
2月24日(金)、1番テーブルミーティングをおいしい広場鐵丸で開催し、美味しいお料理とお酒を堪能しました。野坂マスター、田村サブマスター大変お世話になりありがとうございました。また、会場とチーズケーキをご提供いただいた小沢会員ありがとうございました。
- ・4番テーブル高橋マスター、臼井サブマスター 2月24日(金)、4番テーブルミーティングを平安閣さんで行わせて頂きました。美味しい日本酒と美味しいお食事で大変盛り上がりました。ありがとうございました。
- ・上田、児玉、山田(働)、佐久間、小林(働)、兼城 各会員 2月24日(金)、4番テーブルミーティングをよこすか平安閣で開催しました。美味しいお料理と豪華日本酒を堪能し賑やかで楽しい会となりました。高橋マスター、日本酒差し入れ、臼井サブマスター司会、西村会員会場ご提供ありがとうございました。
- ・物井 会員 大分前にGSEでお世話をしたプエルトリコのフェルナンドが相模原グリーンロータリー出身の奥様と来日中です。明後日日曜日、横浜中華街でランチします。ご一緒できる方はご連絡下さい。美味しいフカヒレを食べましょう。
- ・長尾、石田、比護、南、杉浦、大野(働)、長谷川、上田、大石、永井、加藤(働)、児玉、勝間、浅葉、新倉(働)、江口、小沢、勝見、小佐野、木村、上林、佐久間、澤田、小平、萩原、二瓶、松本(働)、齋藤(働)、齋藤(働)、波島、中村(働)、小保内、小林(-)、鈴木(働)、田中、齋藤(働)、根岸、兼城 各会員  
前田会長、お帰りなさい！ご無理はなさらず、また本日からの例会も楽しみましょう。
- ・前田 会長 沢山のお見舞いの言葉を頂戴し、ありがとうございました。とりあえず本日復帰しました。よろしくお願ひ致します。

<卓 話>

「無限に広がるロータリーの世界」

第4代よねやま親善大使  
ウォーターズ・カレン・ジュリア 様

皆様、こんにちは。ただいまご紹介に預かりましたウォーターズ・カレン・ジュリアでございます。こちらの地区の皆様で私に会うのは3度目となる方もいらっしゃると思いますので、もうそろそろ私のことはちょっと飽きてきたのではないかと思います大変恐縮しております。もしかするとすでにお聴きになられた話と同じような話かもしれませんが、どうぞお付き合いください。よろしくお願ひいたします。

まず、自己紹介ですが、私は第2650地区でお世話になっておりました。1992-93年度の大昔の米山奨学生です。世話クラブは京都南ロータリークラブでした。個人情報を少し開示いたしますと、家族は私と息子2人で、長男は一昨年結婚し去年孫が生まれましたので、家族はこの写真の時より増えています。

このような家族形成です。とにかく犬が大好きで、家にはダルメシアンとジャック・ラッセル・テリアがいて、空き時間があつたら庭で犬と遊んでいるという至ってつまらない人生を送っております。私は日系になります。父方がオーストラリアをベースにしており、母方は祖父母が日本人で、私はオーストラリアで生まれ育ちました。父方のルーツを辿りますと、オーストラリア軍に従事する仕事に関係している親戚が多く、中央の写真はキャンベラの終戦記念館ですが、そこに飾られています。

父と日本の繋がり、1964年の東京オリンピックです。オーストラリア代表団としてレスリングの部で来日しましたが、力及ばず出場はしていませんが、これが切っ掛けとなり日本に興味を持ち始めたというような過程があります。その流れといいますか、それが縁で、私も東京2020では聖火ランナーを務めさせていただきました。母方のルーツは日本にあり、大阪です。母は私の祖父母からプレゼントされたタイプライターがとにかく好きで、英語も大好きで、ケネディ大統領が暗殺された時にはニューヨークタイムスに英語で書いた手紙を送ったということがアメリカでニュースになったくらいの英語が大好き、世界大好きな母親でした。このような両親の元、私はオーストラリアのブリスベンというところで生まれ育ち、普通の公立小学校に入学しました。ヤプーンというオーストラリアでも随分北の方で、グレートバリアリーフの近くののですが、そこで日系の企業とオーストラリアとの合同の大きなリゾート開発がありました。私が小学校3年生の時、もう40年以上前ですが、そこで両親が仕事を任せられることになったので、一家でヤプーンに移りました。

4月25日は、オーストラリアの大きなイベントである「アンザックデー」という戦没者に対する慰霊祭があります。1978年のこの日に運命を変える出来事がありました。それは何かというと、自宅が爆破されたのです。私がパレードに参加をしている途中、家族が家を留守にしている間に、退役軍人会の反開発派、アンチジャパンのメンバーたちによって我が家が爆破されるという、ウィキペディアにも載っているような大きな事件ですが、それは当家でした。私はオーストラリアで生まれ育って、日本語も話せない状態だったのですが、やはり、オーストラリアの歴史の中で唯一行われた地上戦の相手が日本であったということで、今はもうわだかまりなどは全くないのですが、その当時はまだ反日感情が強く、この災難によって父の決断で日本に避難することになり、突然福井県に引っ越しをすることになりました。言葉も何も分からない状態で、突然日本の小学校に転校しました。一生懸命頑張ったのですが、分からないことだらけでした。整列などがきちっとしている様子がオーストラリアとはあまりにも違って、驚きの連続でした。日本は日本で戦争の深い傷跡があり、福井県という場所柄もあって「土地返せ!」などと言われるようないじめを受けました。大家族のおじいちゃん、おばあちゃんが「あんたたちは土地を泥棒した。」と言っているというような誹謗中傷によるいじめがあり、日本でのその頃の思い出はあまりいいものではなく、数年してオーストラリアに帰りました。その時は、元々実家があったゴールドコーストの方に帰り、そこでハイスクールに行ったのですが、なぜ両国での嫌な人たちの気持ちとか、どういうことが背景で皆がそういう差別をするのかを知るために日本の歴史を学びたくて立命館大学に留学し日本史を専攻しました。

その時に米山奨学生として、2年間お世話になりました。当時は米山奨学期間終了後には母国に帰るというルールだったので、一旦はオーストラリアへ帰ったのですが、縁あって再度来日し2000年に起業しました。(株)グローバルウォーターズといい、英語も指導していますが、基本的には国際交流、国際理解学習を



中心にした会社です。グローバル教育にも力を入れています。日本の子供たちがたくさん文化に触れる機会があって、英語を話す空気が提供できれば、いろいろな世界の人と仲良くできるのではないかとということで、自分の小さい頃の悲しかった思い出を繰り返したくないという思いもあって、このような会社を起こしました。

世界を知ることの大切さを日本の子供たちに伝えるという活動もしています。これはあくまでも1つの例なのですが、「テキストから英語を学ぶのではなく、肌で学ぶということが大切、ということから、先生たちに郷土料理を作ったりしてもらっています。ウガンダの先生が作った郷土料理を食べた子供たちが、春休みの留学ツアーでオーストラリアにホームステイに行った時に、たまたま世界大会で来ていたウガンダの選手たちが街を歩いていて、ウガンダの旗を見つけて、この男の子たちが駆け寄り「ウガンダ出身なんですね。僕たちはウガンダのお菓子を知ってるよ!」ということで、一生懸命英語で交流し、子供たちも嬉しかったし、ウガンダの選手たちも遠くオーストラリアに来て、まさか日本の子供たちがウガンダのことについて心を通わせるなど全く思っていなくて、思い掛けない素敵な交流ができました。

教育理念で一番重きを置いていることは、社会に目を向けるという活動です。私は日本とオーストラリアの両方で教育を受けているので、双方を比較すると、オーストラリアは小さい時から社会に目を向け、社会の中の一員だということにすごく重きを置いた教育をしているように思いますので、子供たちにも英語を通して社会に目を向けるという指導をしています。ある日、子供たちに何か自分が役に立てること、自分がやってみみたいことについて何でも応援するからということで、何か活動しようと提案したら、「首里城を助きたい。」と言ってきました。「首里城を復興するのに力を貸してください。」という話になりました。もっと違うことを私は期待していたのですが、彼らが決めたことだから応援するしかないわけで、クッキーを作って販売し売上金を寄付するという企画を作りました。子供たちがクッキーのパッケージをデザインして商品化し、スクールで販売を始めました。売れ行きは順調で、このことを聞きつけて、街の知り合いのカフェとか八百屋さんとか、商工会議所のおじさんたちとかが立ち寄ってくれて「協力するよ。」と言ってくれるなど、小さい教室で1人が発した言葉が、このような形で街のプロジェクトになって行きました。

しかし、そのような矢先にコロナ禍となり、学校にも行けない、スクールもクローズダウンという状況になりました。子供たちの販売目標は500袋だったのですが、コロナのロックダウンの時にまだ200袋売れ残っていて頭を抱えていたら、新型コロナ感染拡大当初の頃はまだ対策が緩かった沖縄の知り合いから、売れ残ったクッキーを全部沖縄に送ってほしい。私たちが助けるということで、逆に、沖縄の皆さんが頑張っている大阪の子どもたちに感動して協力するということになり、これがまたいつしか沖縄の皆さんのプロジェクトにも発展し、みんなで首里場を助けようというボーダーレスな大きなプロジェクトになっていきました。人のために役に立つとか協力するということが、こんなに楽しいんだということをお子たちと再認識しました。

コロナであまり他に話題が無かったことも影響しているとは思いますが、結局その話がどんどん大きくなり、那覇市長に直接子供たちからの寄付を贈呈させていただくことができました。クッキーの売り上げ4万8千円とクラウドファンディングも始め目標額を15万円に設定しましたが、集まったのは9,834円で、手数料引いて、合計51,545円を那覇市長に届けることができました。このプロジェクトを見ていた下の学年の子供たちが次の年に「球磨川の氾濫を助きたい。」というプロジェクトを行いました。また「心のサンタ運動」、これは長年スクールでしていることですが、とにかく人のために頑張る、人を思うことが、こんなに楽しいと、喜んでもらうことの喜びを感じながら、世界に目を向けようという活動をしています。街頭募金をしたり、お菓子を売ったり、カードを一生懸命手作りして、毎年200袋ぐらいのお菓子をいろいろな被災地に届けています。広島のア佐南区の土砂崩れとか、茨城の鬼怒川とか、熊本城、千葉の鋸南、球磨川などの被災地です。全ての被災地に直接出向き、被災された子供たちに大阪の子供たちの気持ちを届けさせてもらっています。

違った活動としては、世界のスポーツに触れるということで、関西で2つ目のジュニアクリケットチームを持っています。小中高生の海外研修プログラムとか、大学の留学プログラムを大学に提供させていただいています。

日本文化を海外に発信することとか、日豪の青少年音楽交流も20年くらい続けているのですが、コロナ前には、日豪両方の子供たちが入り交じった150人弱の素敵なオーケストラでオーストラリアにおいて演奏会を開くことができました

このような風にして国際交流ができ、みんな楽しんでくれていると思っていますが、何か自己満足しているのではないかという思いもあります。そのような中で自分でも反省しているのが、ザ ワールド イズ チェンジング、すなわち世界はどんどん変わって行っていて、教育もどんどん変わって行っていて、VRも普通に教室で使っています。下の写真はインドですが、太陽光パネルで電気がないところでもIT教育、パソコン教育を行っています。私は世界の教育と日本の教育を繋げる役割の一端を担う者として、しっかりとした仕事ができているのではないかと反省しました。世界のIT教育の劇的な進化もありますし、日本の教育が大きな危機に直面している実態を最近肌で感じています。多文化と多様性に慣れている思考型教育により、とにかく自分で考えて行動するという海外の教育と、英語は苦手、受験勉強では点数を取ることが1番重要視されているような日本の教育とでは、子供たちが大きくなった時に世界がどんどん小さくなって、外国人と競争しなければならない時に負けてしまうのではないかという日本の子供たちの弱さを実感して、本当に何とかしたいと思うようになりました。

例えばですが、これは海外の算数の問題文章です。日本であれば「1,000円で1個100円のリンゴが何個買えますか？」とか、「〇〇ちゃんが1個200円のドーナツを5個買うにはいくら必要ですか？」とか、そういう感じですが、海外の小学校低学年の足し算の問題文章を日本語で言いますと、「エリカのお父様が、ガソリン代を節約しようと思って、自分はどれだけガソリンを使ったかを記録しています。去年、お父さんは100リットル使い、今年は90リットルのガソリンを使いました。2年間の合計で、お父さんはどれくらいのガソリン使いましたか？」など、現実の生活に連動させるような教育をしているのです。百分率も習うのは小学校3年生か4年生くらいと思いますが、これはオーストラリアの教科書に載っている問題文章です。「エレッタちゃんは、毎年20パーセントの利息がつく銀行口座に100ドルを預けました。1年間でいくらの利息が付くでしょうか？また、彼女が預金・利息を全く引き出さなかった場合は、1年後に口座にあるお金はいくらですか？」などと、大人になって必要な計算をするために算数はあるんだということを前提にして学ぶのと、とにかくいい点数を取り受験さえ通ればいいという学び方をするのでは、大人になった時の広がりが違うのではないかということから、今はそこに力を入れています。

起業当初は、とにかくみんなで楽しく、世界平和ではないですが、みんなで楽しくできたらいいな、という夢のもとに作ったスクールでしたが、今は、何とか日本の子供たち、若者のグローバル化、そして素晴らしい日本のDNAが、もっと世界で活躍できるようにということで、日本でお世話になった恩返しも兼ね、一種の使命感で頑張らせていただいている日々です。長くなりましたが、自己紹介は以上です。

続いて、米山学友としての活動についてお話しさせていただきたいと思います。先ほども申しました通り、私は1992年、93年に京都南ロータリークラブにお世話になりました。30年以上前の小学時代の資料を持って来ました。1枚違わず30数年前にいただいた奨学金の入っていた封筒です。私の宝物として、ずっと持っています。本当にありがたいことに頂戴した奨学金で大学を卒業することができました。この他にも卓話などでロータリアンの方々にお会いした時の資料も全て持っています。奨学期間が終了した後は母国に帰るのが当時のルールでしたので、オーストラリアに帰り、長年、米山奨学会とは疎遠になっていましたが、日本での仕事が順調に運び、いろいろなことに幸せを感じる度に、今の私があるのは米山奨学会のお蔭であるという深い感謝の気持ちと、いつかは私も恩返ししなければという気持ちになりました。これは私のみならず、多分全ての奨学生が同じ気持ちであると思います。奨学金受給時は気づかないのですが、大人になり、学友になって行くにつれ、どんどん深くなって行く思いです。

私は通訳の仕事もしていて、ロータリアンの方々とお会いする機会が多くありますが、その中で「よねやま」という一言を切っ掛けに、まるで兄弟、まるで家族、まるで親戚ように可愛がってくださいます。仲間として接して下さることにすごくありがたく思いつつも、大変恥ずかしながら「『よねやま』の実態は一体何だろう？」ということで、自らインターネットで調べてみました。すると、東京に事務局があることが分かり、事務局を訪ねて行きました。先ほどの資料も全部持ち、「お世話になったので、私にできることがあったらお手伝いしたい。」ということ伝えるべく東京の事務局に殴り込みました。すると学友会という組織があり、世界中の同じ気持ちを持った学友の皆さんがロータリアンの方と共に、米山奨学生としてお世話になったことを恩返ししたいということで、大きな組織があるからそこに入るといいということを勧められました。

学友会を通しての活動でモンゴルの世界大会にも行かせてもらいましたが、そこで更に自分が全く知らない世界、全く違う国の仲間とたくさん友達になることができました。これは「よねやま」に出会っていなければ実現できなかったことです。

右側の写真でテーブルを囲んでいるのは、エジプト、中国、スリランカ、オーストラリア、ドイツ、韓国人で、皆さん学友で、もちろん繋がり「よねやま」です。共通の言葉は日本語です。共通の思いは日本に恩返ししたいというものです。本当に素晴らしい米山奨学生制度に感謝いっぱいの気持ちのみんなです。

ご縁があって私も2019年にロータリークラブの会員にならせていただきました。仕事上日本とオーストラリアの間を絶えず行き来しますので、実家の近くのオーストラリアのBurleigh Headsロータリークラブの会員にならせていただきました。私たちのロータリークラブというのは、左上の写真にあるようにビーチフロントの海の真ん前が、クラブハウスで、朝食を食べながらのブレックファースト例会です。朝食もシリアルとかいろいろ選べるのですが、こういう感じで、朝7時から8時まで例会をしています。とてもカジュアルで、気楽で、楽しいクラブですので、いつも行くのをとても楽しみにしています。また、IT化の流れではないですが、1番右のQRコードはニコニコですので、現金を持ってない会員はQRコードにかざしてニコニコができます。ZOOM出席の時もこのQRコードがどんと画面に出ますので、「ZOOM出席だからニコニコができない。」という言い訳は、私たちのクラブでは許されないような感じです。

コロナ禍に日本からオンライン卓話をさせていただく機会がありました。もちろん、その時のテーマは米山奨学生制度で、この制度を世界に発信しました。コロナ禍でしたので、英語圏の国の人々がいろいろなロータリークラブのビジターとしてZOOMで行き交わっていて、この日はイギリスとアメリカからゲストが来ていて、世界中に「よねやま」のことを宣伝できたと勝手に自己満足した日でした。私のスクールもロータリーの会員になりました。2020年にできたコアラ・ラバーズ・ロータリークラブというコアラの保護に特化したクラブで、人間以外の救済に特化した初めてのロータリークラブということで、海外では大変話題になっているのですが、その栄えある第1号の法人会員としてスクールが入会させていただきました。目的は子供たちにもっと世界と繋がり、世界のことを知るというためで、子供たちもいろいろなミーティングにZOOMで参加させてもらったり、意見を聞いてもらったり、英語でスピーチしたりする機会をたくさん与えられて、とてもいい学びになっています。

「ロータリーの友」のようなアメリカとオーストラリアのロータリー月刊誌に、このようなすごいクラブがあるということ、そしてオンラインですので、世界中に会員が募られていて日本の子供たちも頑張っているということも取り上げていただきました。私にとりまして「よねやま」とはということを考えて時に、最初は留学生に対する学業のサポートですが、みんなそこに深い感謝の心と恩返し心、何とか恩返ししたいという気持ちを持っていますので、そのことを通して、人と関わる、関わると人との繋がりができて、人と繋がると人生がもっと豊かになって、豊かになるともっと幸せを還元したくなり、それが無限に広がって行く。私は親に日本に来ることを反対されていました。超貧乏学生だったのですが、ロータリーのお蔭で何とか4年間餓死せずに大学生活も送れましたし、そのことが切っ掛けで、私もロータリアンになり、学友になって世界中に仲間ができ、私たちの子供たちもスクールを通してロータリーと出会うなど、無限に広がる素晴らしい世界の第1歩を踏み出させていただいたのが、「よねやま」との出会いであったと思っています。本当にいくら感謝してもし切れませんが、諸先輩方、そして日本の皆様にもっともっと恩返しができるような立派なロータリアンになろうと思いますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

<閉会・点鐘> 13:30 前田 会長

週報担当 大石 朗